



◆問い続ける「ネガティブ・ケイパビリティ」

ネガティブ・ケイパビリティ (Negative Capability) とは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」をさします。あるいは、「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にいることができる能力」を意味します。

<問題>を性急に措定せず、生半可な意味づけや知識でもって、未解決の問題にせっかちに帳尻を合わせず、宙ぶらりんの状態を持ちこたえるのがネガティブ・ケイパビリティだとしても、実践するのは容易ではありません。

なぜならヒトの脳には、「分ろう」とする生物としての方向性が備わっているからです。目の前に、わけの分からないもの、不可思議なもの、嫌なものが放置されていると、脳は落ちつかず、及び腰になります。そうした困惑状態を回避しようとして、脳は当面している現象に、とりあえずの意味づけをし、何とか「分ろう」とします。世の中でノウハウもの、ハウツーものが歓迎されるのは、そのためです。

ここに引用したのは、^{ほしききほうせい} 帯木蓬生 (精神科医・作家) さんの『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』(朝日新聞出版、2017年) です(引用に際し、一部表現を改めています)。ここに示された「ネガティブ・ケイパビリティ」を、私(高崎)は「中腰の状態」でイメージしています。小難しい本を、“これって何やろう…?” と思いながら、分からない部分を抱えつつ読み続けている時に、この「中腰の状態」を維持している自分の姿が思い浮かんでいます。「中腰の状態」には、その姿勢でのぞみ続ける意志と、放棄せずに実際に続ける持続力、そして“読み通せば得られるものがある”という経験が必要です。

せっかく本を読むなら、読んですっきり分かる方がいいに違いない。私も、疲れている時には読みやすい本を選ぶ傾向にあります。しかし、普段は一読して内容がすっきり分かる本では物足りず、気になるところをふり返り、読み返しながらようやく理解出来る本の方が、読んでいて楽しく感じます。例えば、ある本を読んで内容の3割しか分からなかったとします。しかし、その3割分は、その本を読まなければ決して自分の中に残ることがなかった3割なのです。2回目を読むと分かる内容が4~5割に増えたり、逆にどこが分からなかったのかがより明確になります。ここで得た3割分、4~5割分の知識や考え方、感じた内容やとらえ方は、別の本を読んだときにキーワードとして登場することがあり、その繰り返しによって層が重なると、やがて自分なり的一本のラインが見えてきます(それが正しく引けたラインかどうかはさておき)。こうなると、内容の3割しか分からなかった本に挑戦したことは、やはり有意であったと確信するようになります。

一方で、こうした考え方は、タイパ/コスパマインドにどっぷり浸ってしまっている人には受け入れ難いものでしょう。一回読めばすっきり全部分かる方がいい。いや、大事なポイントだけ知れたらそれでいい(そもそも本なんか読まないし)。映画を早送りや飛ばしながらで“見た”のチェックボックスに✓が入る人には、とても無駄でまどろっこしいことをしているように思えることでしょう。しかし“ビタミンCを摂取するにはレモンなぞ食べなくても錠剤で充分だ”というようなマインドは(それが身体上・健康上の理由から最良の術であるという場合は別ですが)、例えばレモンの色も匂いも風味も知らず、「檸檬」という文字を思い起こすことも、梶井基次郎や京都の丸善に積まれた画集も、大塚国際美術館もイメージしないような、そんな

生き方は、私はやはり寂しく、やはり物足りないと感じてしまうのです。

帚木蓬生さんは、続けてこう書いています。

「分かる」ための窮極の形がマニュアル化です。マニュアルがあれば、その場に展開する事象は「分かった」ものとして片づけられ、対処法も定まります。ところが、ここには大きな落とし穴があります。「分かった」つもりの理解が、ごく浅い次元にとどまってしまい、より高い次元まで発展しないのです。

ネガティブ・ケイパビリティは、稚拙な理解ではなく、謎を謎として興味を抱いたまま、宙ぶらりんの、どうしようもない状態を耐え抜く力です。その先には必ず発展的な深い理解が待ち受けていると確信して、耐えていく持続力を生み出すのです。

これら文章を、私は探究Ⅱ地公スタンダードの最初の課題で紹介しました。詳しくは地公スタ選択の人に訊いてみて下さい。探究は、まさにネガティブ・ケイパビリティが大きくものを言う活動です。

本を読むことを例に話を進めてきましたが（もちろん本は読んでほしいのですが）、今夏の時間をどう使っていくのか、今秋～冬にかけて志望学部を固めていくために、そもそも自分がどういったことに進学先でもっと知りたいと思っているのか、取り組んでみたいのか、挑戦してみたいのか——そうしたことも考える機会にしてほしいと思っています。少しでもハイレベルをめざす志は自分を押し上げてくれるものである一方で、決して、“いい大学・就職に有利な学部”をめざすことが自分にとって正解であるとは限りません。

不思議なもので、考えている人にはヒントがたくさんもたらされます。その理由は、“引っかかる”からです。“アンテナを張っていると感度が高まり情報をキャッチしやすくなる”からです（第15号：2022年12月15日）。

たくさんのが、自分の中に蓄えられる夏休みにしてください。

◆8/21(月)の時程

8:20 朝 SHR → 体育館へ移動

8:35～ 全校集会

9:15～ 大掃除

10:00～14:05 宿題考査

I) 10:00～11:00【英語】(60分)

II) 11:20～12:20【国語】(60分)

<昼休み>

III) 13:05～14:05【数学】(60分)

14:20～15:10 学年集会(体育館)

*集会は修学旅行のコース別体験の説明です

「生野ベーシック」を意識した復習を!

1. 平日90分以上、土休日180分以上の自主学習をしよう
2. 基礎内容を、1・2年生で完全に理解しよう

「量より質」は一定以上の量の確保を前提としています。量あつての質(第27号:2023年5月15日発行)。普段、量の確保が難しい学習、特に国数英の3教科の学習をしっかりと確保しましょう。2年で下げてしまった分だけ、3年生での伸びを“回復”に費やし、無駄にしまいます。下げなかった分だけ、3年生での伸びが、全て本当の伸びとして自分のものになります。

◆夏休み明けの予定

7/20(木) B木1・2+全校集会<私物撤去>

*8/18(金)午前中までに文化祭の準備物を全て撤去する日を、各クラスで設定すること

8/19(土) 教員採用試験会場

20(日) ” (予備日)

21(月) 上記参照<昼食必要です>

22(火) 午前中授業

23(水) 午前中授業・進路保護者会

24(木) 平常授業再開(70分×4+LHR)

31(木) 60分授業×3

午後:SSH・探究Ⅱ中間発表会

9/1(金) 午前中授業+4限LHR(体育館設営)

◆国公立大学について、しっかり考えてみよう

①【教員一人当たりの学部学生数】

大学名	学部学生数	教員数	教員1人当たり 学部学生数
同志社	26176	778	33.6
関西	28071	751	37.4
大阪	15693	2270	6.9
神戸	11951	1518	7.9
大阪市立	6657	710	9.4
徳島	5855	946	6.2

②【大学院への進学状況】

系統	2021年度		
	国立	公立	私立
全 体	33.9%	13.8%	5.6%
人文科学	10.8%	7.6%	3.4%
社会科学	6.6%	1.9%	2.1%
理 学	60.1%	59.5%	27.6%
工 学	64.9%	39.3%	21.3%
農 学	44.5%	25.9%	9.1%
保 健	13.3%	6.0%	3.0%
家 政	31.5%	12.7%	1.7%
教 育	9.4%	5.6%	2.1%
芸 術	36.9%	20.3%	6.8%
そ の 他	33.1%	17.4%	4.3%

③【科研費助成事業】 2021年度採択件数順

1 東京	16 千葉	31 山口
2 京都	17 新潟	32 群馬
3 大阪	18 東京医科歯科	33 東京都立
4 東北	19 熊本	34 東海*
5 九州	20 日本*	35 東京理科*
6 名古屋	21 立命館*	36 横浜市立
7 北海道	22 順天堂*	37 富山
8 筑波	23 長崎	38 大阪府立
9 広島	24 信州	39 三重
10 神戸	25 鹿児島	40 弘前
11 慶応義塾*	26 徳島	41 山形
12 早稲田*	27 名古屋市立	42 岐阜
13 岡山	28 大阪市立	43 同志社*
14 金沢	29 愛媛	44 北里*
15 東京工業	30 近畿*	45 明治*

*は私立大

今夏も、進路指導部から「大学探訪・オープンキャンパス参加レポート」の宿題が出ています。6月の進路希望調査で、77期生2年生の97%超が、国立大学・公立大学を第1志望に掲げていました。家から通える近隣の範囲にとどまらず、地方も視野に入れた強い国公立大志望が生野高校生の例年の特徴であり、さらに保護者もまた、そうした生野生の志望を理解し、後押ししてくれる傾向が顕著にみられます。

一方で、みなさんの様子を見てみると、“何となく国公立という雰囲気だから…”という人もいるのではないかと思います。そこで、“何となく”の志望を、“もっとしっかり分かった上での志望”に高める、3つのデータを紹介します。

左の3つの表は、いずれも今年度、河合塾から提供されたデータです。大阪公立大のものが出揃っていないため大阪市立大・府立大のものを含んでいますが、傾向を見るうえで特に支障はありません。

①では、数値が小さい方が、大学教員1人あたり少人数対応で学生を受け持っているということになり、よりきめ細やかな教育が可能な環境と言えます。また、教員数の多さは専門分野の多様さに結び付き、学生が“この分野に挑戦してみたい!”と思った時に、それらが実現できる可能性を高めてくれます。表には私立大の例が挙げられていますが、この2大学に限らず、他の私立大においても、教員1人あたりが担当する学生数は、国公立大と比べるとこれくらいの差が開いています。

また、②③に示されるように、学問・研究の面においても国公立大の健闘が顕著です。②を見ると、学力層が比較的高い水準の大学に設置される理学部・工学部系においても、大学院への進学率は国公立が私立を大きく上回っています。③の科研費(科学研究費)助成は、独創的・先駆的研究に対して国から助成される研究費で、知名度の高い大学のみならず、地方国公立大の健闘が目立ちます。こうした点を見ると、共通テストと二次試験を受け、多くの受験生が国公立大をめざす理由が頷けます。

もちろん、私立大にはそれぞれの強みがあります。“この分野においては他の追随を許さない”といった独自の特徴を有しており、それぞれの大学の学風や特徴的なカリキュラムは、その分野を志す高校生にとって、自己実現の場として選ばれていくことでしょう。各私立大の強みは、アドミッションポリシーや建学の精神に記されているので、Web サイトで調べてみましょう。

◆地方国公立という選択肢

ところで、「地方も視野に入れた強い国公立大志望」とは言え、自宅をはなれ地方国公立大へ進学——という 21 ヶ月後（2025 年 4 月）の自分の姿を想像できない、と思う人もいるでしょう。しかし、生野高校からは、かなり積極的に各地方大学への進学がみられます。この地方国公立大については、昨年度の夏の懇談資料『高校生の保護者のための Career Guidance』に示されているとともに、今年度版の『進路のてびき』P67 にも記載があるので参照してください。下宿費や仕送りのことを考えると…と思うかもしれませんが、私の結論としては、次の 2 点です。

- ① 理系なら地方国公立の方が、自宅から私立大通学よりも費用が抑えられます
- ② 文系でも自宅からの通学費を考えると、下宿+地方国公立大と自宅から私立大通学とで総費用はほとんど変わりません（下宿は通学費用がほぼかかりません）

◆「それを高3で初めてやりますか？今のうちにやっておけることは、今のうちにやっちゃっておきませんか？」

この見出しのフレーズは、1 年次の学年通信第 20 号（2023 年 2 月 16 日発行）で紹介したものです（少し変えてありますが）。今号で大学選びの話をしてきたのには理由があります。願書を記入することは、直前にしか出来ません。しかし、募集要項を取り寄せてみることは、今すぐにでも出来ます。一度取寄せておけば、来年度も同じ手順をくり返すだけで済みます。

高 3 生の時にしか出来ないことは当然あります。しかし、高 1・高 2 のうちに着手しておけることもたくさんあります。例えるなら、フィールドに出てプレーをするのは来年にしか出来ないことだとしても、今のうちに必要な器具・用具を準備し、すぐに使えるよう並べておくことは出来る——といったところでしょうか。

6/29(木)の LHR で、国公立大の今夏のオープンキャンパス一覧が配付されているはずですが、申し込みは済ませましたか？国公立大のオープンキャンパスは人数制限があり、多くは先着順または抽選の申込制になっています。ちなみに大阪公立大のオープンキャンパス申込みは 7/19(水)が〆切でした。これは上記の一覧の紹介だけでなく、3 階の学年掲示板にフライヤーも掲出してあります（〆切日に赤〇も付してあります）。このように、情報は既にみなさんの目の前に示されています。Google Classroom での配信や、担任の先生からのプリント配付、学年掲示板への掲出など、告知・案内もなされています。あとは、各自がそれに気付き（気付くためには日頃から意識を向けておく必要があります）、担任の先生の話をも自分事としてとらえ（クラス全体に向かって話をしますが、一人ひとりに必要な話をしています），“パッとすぐに動く・取り掛かりが早い”を実践するのみです。

「自分の大学受験は、自分が一番の専門家であれ」。オープンキャンパスに申し込むのも自分。資料取り寄せを行うのも自分。どういった学問分野に進み、どの学部・学科を志望するのかを考えるのも自分。必要なタイミングと、必要な材料については、学校側から示すことが出来ます。しかし、実際に考え、実際に動くのは他の誰でもない、自分です。